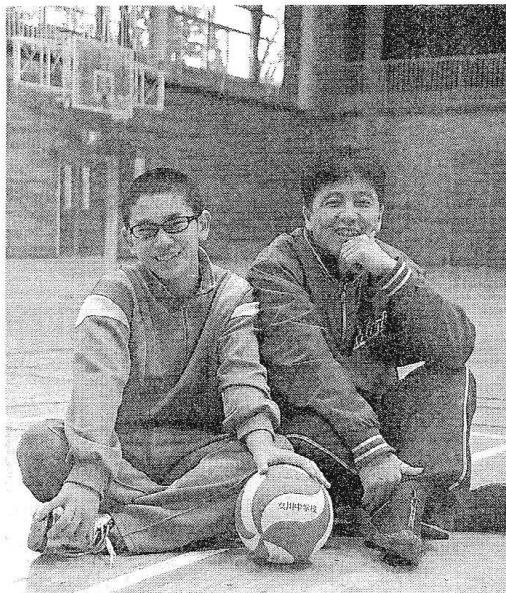


先生と語る 私たちの希望



小野智美撮影

2人はバレー部の部員と顧問。木村さん＝写真左＝は津波で母方の祖母をなくし、仮設住宅で暮らす。2年生で生徒会長。女川一中は津波を免れ、離島・出島の女川第一中学校が一中で再開。二中の保護者たちは町中の仮設住宅にとどまり、新年度に統合して女川中になる。佐藤さん＝同右＝は国語教諭。震災後から全校生徒の俳句作りを指導する。津波で小学6年の次女を亡した。

中学一年の最初の社会科の授業から、みんなで津波対策を考えてきました。昨年11月に町長や町議会の人たちにそれを発表した。紹介をつくる。記録に残す。高台に避難所をつくる。三つの対策を

発表後、質問が出た。質問の内容は忘れたんですけど、自分の答えは覚えてます。

「これから俺たちが変えていくので、みなさんへ心配しないで、温かく見守ってください」

「絶対に期待に応えてやる」という気持ちを込めて答えると、会

心配ない俺たちが変える

宮城県女川町立女川第一中学校

木村 竣哉さん(14) × 佐藤 敏郎先生(49)

手には何が込められていたのか。あの拍場に拍手がわきあがつた。

三つの対策は全部、実現させたい。例えば、記録に残すため、町の21の浜すべての津波到達点に石碑を建てたい。21基の建立に1千円はかかる。いま、このための100円募金を始めています。

日本の人口の千分の1の人たちの協力をを集められればできる。あなたがち遠い未来の話ではなく、すごい近い未来の話ではないかな。

高校生になつた先輩たちと一緒に活動する場面があるかも知れない。後輩たちもまきこみたい。この活動は、大げさかもしれないけれど、死ぬまで続ける。俺の夢は作家なんですが、津波をテーマで本を書いていこうかな。

あの日、坂の上から、ちょっとだけ波が見えた。音も聞こえたはず。でも音は吹き飛んで、映像だけが残っている。まだ覚えていてね。その中に、ばあちゃんが住んでいた家がちらつと見えた。

1年秋に国語の授業で作った句「こみあげる無力感が止まらない」。俺が津波を止めようとしたけど、助けることはできなかつたのか。その思いは今もあります。津波があつてそれで終わり——ではなく、あとはどうする。テレビで当時の映像を見るのは嫌です。でも、口にしたくないとは思わない。黙つていては、何かも伝えられない。声に出したほうが覺悟ができる。自分がやろうとしていることは、自分のためにも書つたほうがいいと思う。さういふべきだったんだと思つた。敏郎先生を含めて、誰にでもきつかったんだと思つた。

で、ドキドキする人もいる。俺もそうだ。でも、その言葉を一生避けて通るわけにもいかない。3月11日は毎年くるんだから——と話が一言メッセージを書いた。

「なになに3・11」というものです。俳句より長くてはだめ。呼びかけでもいい。自分しか分からぬい言葉でもいい。無理に書かなくていいよ。そう伝えました。

3・11を前にメディアが沸く。子どもたちが情報にさらされる前にやらなければ、と考えました。俺の一言は「3・11私のスタート地点」。あの日から避難所生活が始まり、すべて始まった。スタートには前向きな響きがある。でも、本当の悲しみも、あの日から始まつた。そんな話もしました。

「流れ星を二つ見た3・11」と書いた子もいた。あの晩はみんなで体育館に泊りましたからね。ふさげて書く子もいた。書かな

生徒がつくる俳句を張り出しています。「あいつはこう思っているんだ」「俺と同じだ」と味わい、自分の位置確認ができる。俳句も、一言も、言葉を探すことは、自分と向き合い、自分の心を探すことです。言葉によって、あれが、えたいの知れないものではなく、輪郭が見えるてくる。今年に入り、3年生には200字の作文を書かせていました。教科書で魯迅の「故郷」を読んだ時は「希望」について。希望を「光」にたどった生徒が多くつた。私もそう書くかもしれないな。

こういう状況でも人間は希望を持てるんだと思いました。厚い雲があると、光は見えない。でも少しでも雲が切れれば、光はまつすぐに差し込んでくる。太宰治の「パンダラの匣」の最後にあるように、植物はどんな小さな光でも見つけて伸びていくんですね……。それも猛スピードではなく、ゆっくりだ。(聞き手・小野智美)

ばあちゃんが死んだなんて、今でも信じられない。母さんは元気によく振る舞っているけど、かなりシヨックだったと思います。敏郎先

2月15日、全校生徒で防災集会を開きました。テーマは「3・11と向き合う」です。
もうすぐ、あの日が来る。「震

い子もいた。それはそれでいいんです。思いは一つじゃない。「忘
れたい」という思いも大事。向き合ふ気持ちは一人ひとり違う

言葉で探そうあの日の輪郭